



希望創発センター

Center of Education and
Research for Hope-Emergence

2022 年度 希望創発センター 事業報告書

2023 年5月

高知大学 希望創発センター

目 次

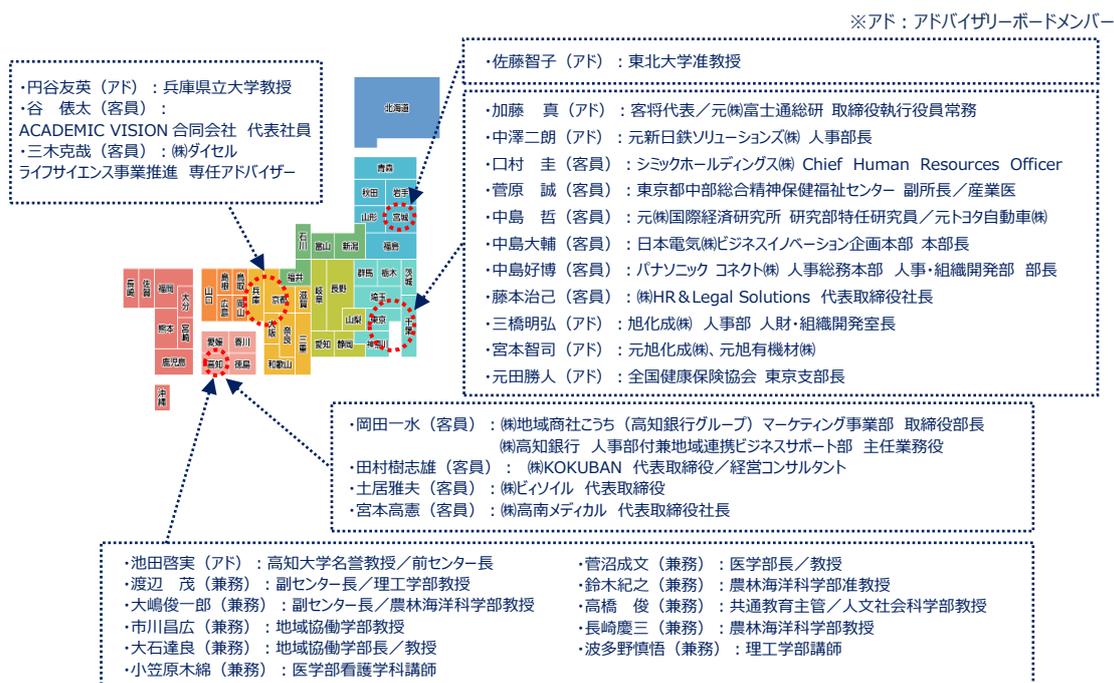
1. ガバナンス	1
1.1 教員スタッフ構成	
1.2 主な委員会等の開催実績	
2. 希望創発研究会	2
2.1 概要	
2.2 2022（R4）年度取組実績	
2.2.1 参画者	
2.2.2 研究会例会の開催実績	
2.2.3 研究会例会プログラムの構成	
2.2.4 研究会におけるチーム編成と支援体制	
2.2.5 企業関係者との情報交換の実施	
3. OTOYOプロジェクト	6
3.1 概要	
3.1.1 目的	
3.1.2 実績と成果	
3.2 2022（R4）年度活動報告	
3.2.1 明日の社会の希望をになう人財プログラム	
3.2.2 東豊永地区希望創発プログラム	
4. 人間関係形成インターンシップ（Society Based Internship ; SBI）	7
4.1 概要	
4.2 2022（R4）年度活動報告	
5. その他	9
5.1 学生自主団体 Seekers の活動実績	
5.1.1 対話スナック	
5.1.2 オンライン公民館	
5.1.3 出前養殖プロジェクト	
参考資料	
2022年（R4）年度希望創発研究会 最終報告会資料の要旨集	13

1 ガバナンス

1.1 教員スタッフ構成

2022 (R4) 年度の教員スタッフは以下のとおり。

学外有識者等から『希望創発エコシステムづくり』に関し、意見又は助言を求めることにより、希望創発センターにおける『希望創発エコシステムづくり』を更に推進することを目的として令和4年度からアドバイザリーボードを設置し、メンバーとして以下8名が所属している。



1.2 主な委員会等の開催実績

2022 (R4) 年度は、特任教員が不在となったため運営推進委員会を休会とし、センター長、副センター長が主な委員である企画運営室会議においてセンターの運営及び事業全般の審議、報告を行った。また教員会議は、必要に応じて開催した。なお、会議は、全てオンラインで行った。

会議名	開催実績
運営推進委員会	休会
企画運営室会議	原則月1回のオンライン開催とし、最終的に計14回を開催した。
教員会議	必要に応じて研究例会終了後に開催した。

2 希望創発研究会

2.1 概要

○ 特徴1：思考行動変容支援と知的情報提供のための AOL 型と SOL 型セミナーの実施

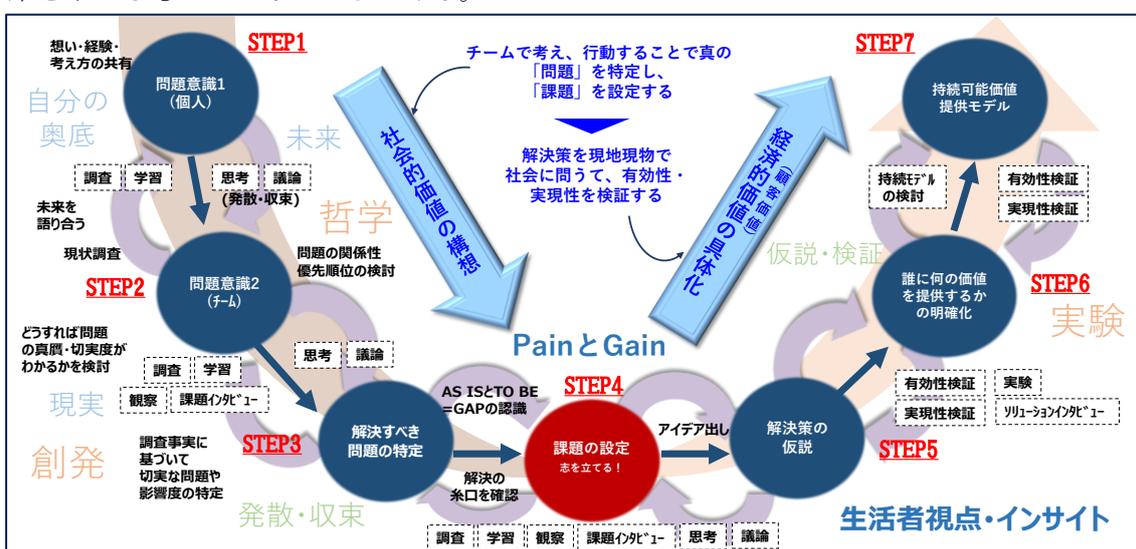
月1回(土日)の頻度で開催する研究会は、5～6名の学生と企業人混成チームでテーマの深掘りやソリューション型ではない課題解決の企画立案を目指すことを目的とし、そのために必要な「当たり前を疑う」などの思考行動変容や思考法やその整理などを支援する AOL 型と SOL 型のセミナー(※)の実施を柱に、高知での現地調査や研究成果の共有(報告会等)などを行ってきた。

※ 学術志向型学習(AOL; Academic-oriented Learning)：大学が長い歴史の中で蓄積してきた教養教育や専門教育を土台として普遍的な真理や高度に抽象化された概念理解を目指す学び

※ 社会志向型学習(SOL; Social-oriented Learning)：流動的な社会状況において他者と共創する経験に基づいた学習

○ 特徴2：持続可能な価値提供のための価値検討プロセスの展開

希望創発研究会では、営利や非営利を問わず、その目的を実現するための活動の総体を事業と定義し、目指すものは「持続可能な価値提供」である(下図参照)。ただし、目標のゴールは事業化提案にあるが、必須とはしていない。試行錯誤の活動プロセスこそが研究会の目的であり、哲学・創発・志および実直な仮説・検証をないがしろにした、辻褄合わせの結果を求めるものではないからである。



○ 特徴3：目指すべき人財像アプローチの観点からの研究会プログラムの設計

希望創発センターでは、「哲学」と「創発」の習得と実践を通して、参加者の自主性を引き出し、自ら考える力を磨くとともに、事実を多面的にまた深く観察し、視野を広げ真の課題に到達できるように主体性を持って行動できる行動様式を身に付けるプログラムを「目指すべき人財像アプローチ(下表)」の観点から設計している。

目指すべき人材像のアプローチ
「なぜ」と考えることが習慣化したか？
「新しいものごと」ではなく、「普遍的なものごと」に目を向けることが出来たか？
他者との関わりによって、自分の特徴や物差しに気づけたか？
まずは「役に立つか？立たないか」の物差しではなく、自分自身の物差しでものごとを捉えることが出来たか？
近視眼的な目的指向に走るのではなく、自由に思考・行動が出来るようになったか？
研究会活動をとおして「感覚」や「感情」は揺れ動いたか？
社会に対して、あるいは自分自身に対して、これまでに感じたことがない違和感を持つようになったか？ また、その違和感の招待にアプローチ出来たか？
世界に対する捉え方が以前と変わったと感ぜられるか？
みんなでやるからこそ、辿り着ける場所があることを実感できたか？
日常を足場として、希望ある未来の創成の一翼を担ってやろうという気持ちが立ち上がって来たか？
自分のフィールドに戻って、これまでと違った目線で物事を見たり感じたりするようになったか？

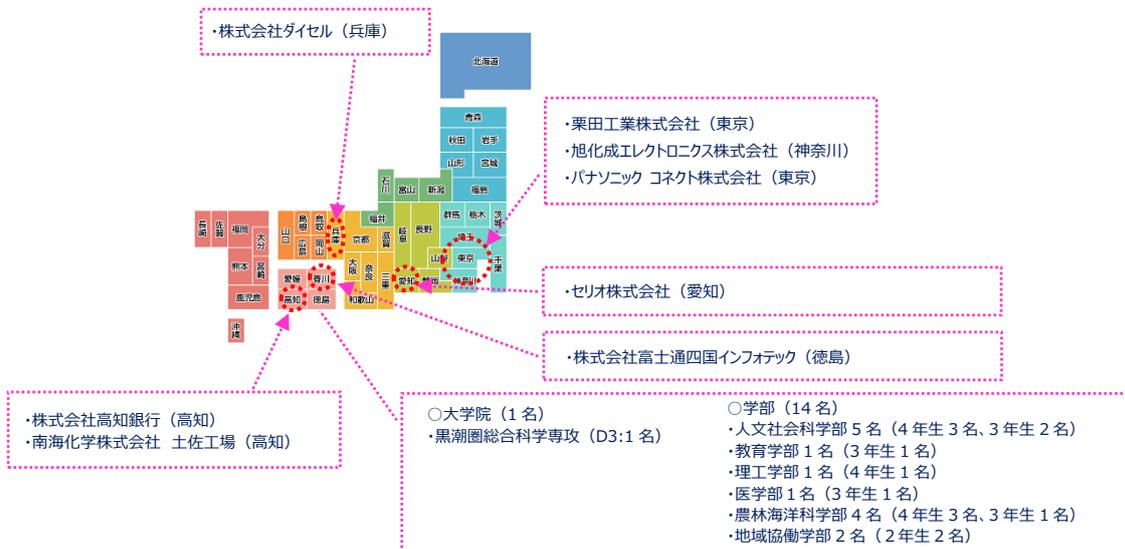
○ 特徴4：参画者個人の思考行動変容の自覚化に係る支援

希望創発研究会においては、参画者が研究会活動における各自の思考行動変容の自覚化支援として、研究会活動終了時に研究成果に関わる個人論述書や活動のリフレクションレポートの作成を必須化し、これらの資料を参考に、チームのファシリテーションを担当する複数の関係教員（基本：客員と兼務各1名）が個人最終レビューシートを作成し、参画者や派遣企業担当者に対しフィードバックする方法を確立した。

2.2 2022 (R4) 年度取組実績

2.2.1 参画者

コロナ禍の影響も危惧されたが、対面実施6回、オンライン実施5回の計11回のハイブリッド型で実施を想定し、また本年度から有償での取り組みとなったが、結果的には、参画社員は5地域から8社9名が、学生についても15名（院生1名、学部生14名）の参画を得た。詳細は、下図のとおり。



2.2.2 研究会例会の開催実績

2022(R4)年度は、2022年度と同様に研究会は5月に開始とし、予定どおりハイブリッド型での年11回開催した。

チーム状態目標	開催月	開催日（原則、第2土日）	実施方法	内容
●思考行動の変容 自身の“ありたい姿”を起点にインスピレーションと洞察から未来の社会を創造・発想（未来の推論）し、その実現に向け真剣に考え・行動する準備が整っている。	5月例会	5月14日（土）～15日（日）	オンライン	参画メンバー全員での関係づくり
	6月例会	6月11日（土）～12日（日）	対面	参画メンバー全員で高知を知る
●問題の特定と解決課題の設定 “チームが実現したい世界観”が描けており、その実現に向けた「問い」を立て、解決すべき問題を特定すると共に、それを解決するための課題を設定できている。	7月例会	7月9日（土）～10日（日）	対面	チーム対話：チームプロジェクトの検討
	8月例会	8月20日（土）～21日（日）	オンライン	チーム対話：チームプロジェクトの検討
	9月例会	9月10日（土）～11日（日）	オンライン	チーム対話：チームプロジェクトの検討 - “ビジョン”の決定-
●解決策の仮説設定と検証実践プロジェクト案策定 現地調査、観察、インタビューなどの現状把握を通して、設定した課題を解決するための仮説が設定され、その検証のための実践プロジェクトが実施されている。	10月例会	10月8日（土）～9日（日）	対面	チーム活動：高知での現地調査＆“潜在的ニーズ”や“カスタマー像”の検討
	11月例会	11月12日（土）～13日（日）	対面	チーム活動：高知での現地調査＆“潜在的ニーズ”や“カスタマー像”の検討
	12月例会	12月10日（土）～11日（日）	オンライン	進捗状況報告会
●解決策の社会活用プロトタイプの設定 実践検証を通して解決策の仮説の有効性や実現性が確認され、その解決策を基にした社会活用プロトタイプが検討されている。	1月例会	1月7日（土）～8日（日）	対面	チーム活動：高知での現地調査＆課題解決策の検証
	2月例会	2月11日（土）～12日（日）	オンライン	チーム対話：課題解決策の検証
	3月例会	3月4日（土）～5日（日）	対面	最終報告会

- ・ 開催期間・回数：2022(R4)年5月～2023(R5)年3月（毎月1回土日開催）・11回開催
- ・ 開催方法
 - * オンライン開催：5回（5月、8～9月、12月、3月）
 - * 対面開催：6回（6～7月、10～11月、1月、3月）

※10～11月高知県内での現地調査の実施

2.2.3 研究会例会プログラムの構成

毎月の例会プログラムは、原則、基礎セミナー（2時間程度）及びリフレクションの実施とチーム討議を基本とし、10月～1月の現地調査を踏まえたチームでの討議成果を3月例会において共有（最終報告会）する構成とした。今年度の基礎セミナー及び全体ワークショップの開催実績は以下の一覧表のとおり。

開催月	基礎セミナー・全体ワークショップの実施内容
5月例会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 理念醸成セミナー-希望創発センターとは-（講師：大嶋俊一郎副センター長） ・ 話してみても、お互いを知るワークショップ（講師：谷俵太客員教員）
6月例会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 超芸術トマソン（講師：谷俵太客員教員） ・ トマソン形式知化（講師：縣拓充氏（千葉大学特任講師））
7月例会	<ul style="list-style-type: none"> ・ フィールドに出て行って「土佐を知る！」（講師：谷俵太客員教員）
8月例会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 問いのデザイン-自分ゴトと他人ゴトの境界線を引き直す-（講師：塩瀬隆之氏（京都大学准教授）） ・ 希望創発基礎Ⅰ（講師：船木成記氏（つながりのデザイン 代表理事））
9月例会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 希望創発基礎Ⅱ（講師：船木成記氏（つながりのデザイン 代表理事）） ・ 希望創発研究会の進め方-皆で考える題材として-（講師：中島大輔客員教員）

12月例会	<ul style="list-style-type: none"> ・明日からはじめるローカルプロジェクト（講師：若狭健作氏（株式会社地域環境計画研究所 代表取締役）） ・好きなことをしていきたい人が、会社経営で考えたこと（講師：本郷旬氏（セリオ株式会社 代表取締役社長））
1月例会	<ul style="list-style-type: none"> ・すじなし屋（客人：村井満氏（第5代日本プロサッカーリーグ（Jリーグ チェアマン））、席亭：大嶋俊一郎副センター長） ・先の見えないこの世界をどう生きるか？（講師：村井満氏（第5代日本プロサッカーリーグ（Jリーグ チェアマン））

2.2.4 研究会におけるチーム編成と支援体制

研究会活動は、5名程度の学生・企業人混成チームを5チーム編成して行った（詳細は以下の一覧表を参照）。チームには、企業関係教員（客員）と兼務教員各1名を配置し、例会時の対話の場づくりやプロジェクトマネジメント、チームメンバーが作成する年間活動リフレクションレポートと個人論述書を踏まえた最終レビューシート作成に加え、ボランティアの形でインターバル中のチーム討議（任意）やメンバーのキャリア形成に関わる支援も行ってもらった。なお、検討成果を共有する最終報告会のタイトルは以下の一覧表のとおり。

○ 最終報告会・チームの報告タイトルとメンバー所属先一覧（報告要旨は巻末資料参照）

チーム	タイトル・メンバー	
1	報告タイトル：「つながり」と「ひとり」のバランス 参画社員（セリオ株式会社） 参画社員（株式会社ダイセル）	参画学生（農林海洋科学部） 参画学生（地域協働学部） 参画学生（人文社会科学部） 参画学生（人文社会科学部）
2	報告タイトル：人生変わっちゃう!? 高知で!? ～高知まるごと体験プログラム～ 参画社員（南海化学株式会社 土佐オフィス） 参画社員（セリオ株式会社）	参画学生（人文社会科学部） 参画学生（農林海洋科学部） 参画学生（理工学部）
3	報告タイトル：こう Chill ? 参画社員（パナソニック コネクト株式会社） 参画社員（株式会社高知銀行）	参画学生（教育学部） 参画学生（人文社会科学部） 参画学生（農林海洋科学部）
4	報告タイトル：関係人口増加へ寄与するための提案 参画社員（旭化成エレクトロニクス株式会社） 参画社員（株式会社富士通四国インフォテック）	参画学生（人文社会科学部） 参画学生（農林海洋科学部） 参画学生（地域協働学部） 参画学生（医学部）
5	報告タイトル：人を幸せにする水産業の実現に向けて 参画社員（栗田工業株式会社）	参画学生（黒潮圏総合科学専攻）

2.2.5 企業関係者との情報交換の実施

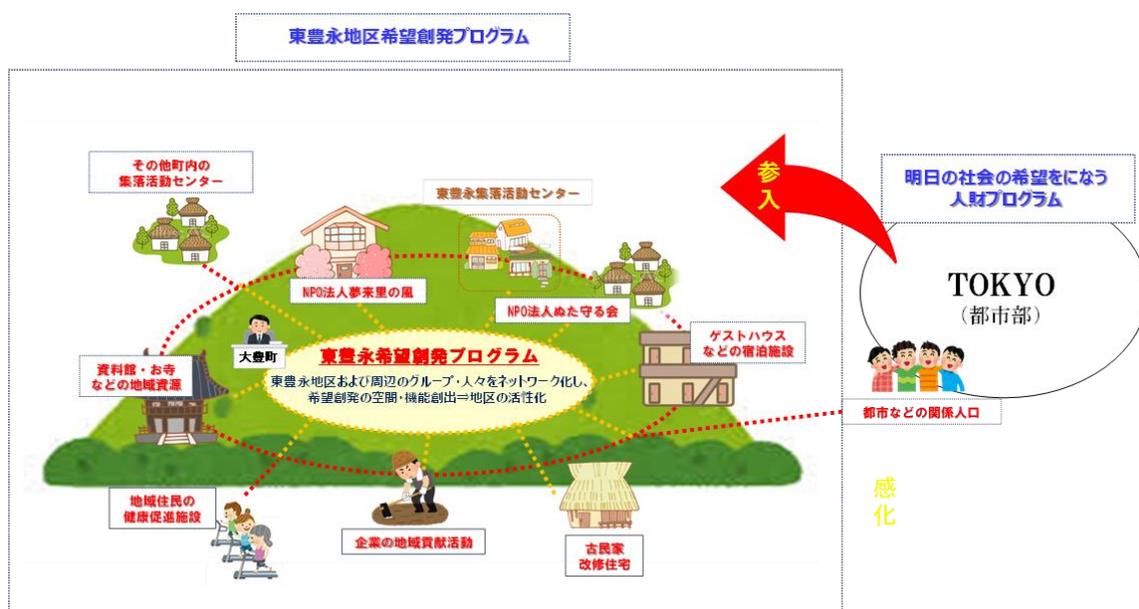
令和3年度はコロナ禍のため企業関係者との直接的な意見交換が十分に行えなかったことを踏まえて、令和4年度は希望する企業関係者を対象として10月25・27・28日の3日間、オンライン会議システム（Zoom）にて意見交換会を実施した。

3 OTOYOプロジェクト

3.1 概要

3.1.1 目的

関係教員の中で大手企業の人事の変革を目指す客員教員と限界集落である大豊町東豊永を再生したい兼務教員の想いが出会い、それらの目的を同時に実現する OTOYO プロジェクトが誕生した。本プロジェクトは、企業の社員ばかりでなくこの社会に暮らし、考えるすべての人々を対象とする「明日の社会の希望をになう人財プログラム（以下、明日の人財プログラム）」と、パラダイム破壊型の限界集落再生を目指す「東豊永地区希望創発プログラム」を融合する事業として展開するものである。



3.1.2 実績と成果

2022(R4)年度においては、以下の成果（outcome）を得ることができた。

- ・明日の人材プログラムについては、2022年11月に第1回目の実施を予定していたが、プログラム内容の改善のために2023年度の実施に延期した。
- ・東豊永地区希望創発プログラムについては、活動拠点のNPOの運営補助をおこなった。具体的には、夢来里の風まつりの開催、薬膳料理を楽しむ会などのイベントの実施をおこなった。
- ・小林製薬㈱との連携推進のための財源としての寄付金（100万円）を得た。活動財源確保のためにいくつかの助成金の申請をおこなった。そのうち子どもゆめ基金からの助成（2023年度実施）が決定した。
- ・OTOYOプロジェクトの取組を通して、小林製薬㈱をはじめ、大豊町、高知県産業振興課（嶺北担当）、牧野植物園へと連携活動を昨年度から引き続きおこなった。

3.2 2022 (R4) 年度活動報告

OTOYO プロジェクトは、企業の社員ばかりでなくこの社会に暮らし、考えるすべての人々を対象とする「明日の人財プログラム」と、パラダイム破壊型の限界集落再生を目指す「東豊永地区希望創発プログラム」を融合する事業として展開するものである。2022 (R4) 年度においては、プログラム別に以下の取組と成果を得た。

3.2.1 明日の社会の希望をになう人材プログラム

- * 明日の人財プログラムは、リモートで行う第1部と第3部、2泊3日の合宿形式の研修の第2部の3部構成とした。第1部は本プログラムの趣旨説明と大豊の概要紹介、第3部は、参加者のキャリアの考察を目的としている。2022 (R4) 年度からの本格実施を予定していたが、プログラムの改善の必要性があり、実施は2023年度に延期した。
- * プログラムの参加者を集めるためにホームページの制作をおこなった。

3.2.2 東豊永地区希望創発プログラム

- * 東豊永地区希望創発プログラムが目指す「中山間集落の振興を図るため人の交流を盛んにし東豊永地区の活性化に寄与する」ための拠点の1つとして、地域住民によるNPO法人夢来里の風の運営・支援を行った。
- * NPO法人夢来里の風の運営・支援に加え、市川部会長、丁野特任研究員及び土居客員教員が既存のNPO法人ぬた守る会や東豊永集落活動センターの会合に参加し、関係者との信頼関係構築に努めた。
- * 本プログラムの取組に際し、企業が注目するCSV（共通価値の創造）を推進していた小林製菓㈱と連携し、連携推進のための寄付（100万円）を得た。活動財源確保のためにいくつかの助成金の申請をおこなった。そのうち子どもゆめ基金からの助成（2023年度実施）が決定した。

4 人間関係形成インターンシップ (Society Based Internship ; SBI)

4.1 概要

人間関係形成インターンシップ (SBI) の基本コンセプトは、(a) 参画するすべての協働者が「本気」で取り組める仕組み、かつ (b) 本気の取組が醸成する相互信頼関係の形成にある。(a), (b) を達成するために、学生の場合、事前セミナーに始まり、3人一組での15日間のインターン、実習終了後の事後セミナーおよび報告会、さらに、その後半年間に亘って行う月1回の振り返りと6ヶ月目の再度の報告会を実施する。受け入れ企業の実習支援者 (SV ; スーパーバイザー) については、学生への15日間の振り返り (面談) 支援、日報へのコメント記入や報告会への参加などを実施する。なお、両者の本気形成のための支援として学生対象のセミナーとSV向けの目標設定塾など実習前・実習後に実施する。

4.2 2022 (R4) 年度活動報告

第21期(2021年10月～2022年3月に実施)の6ヶ月後報告会を2022年9月22日に実施し、11名に修了証書を授与した。

第22期は、以下のスケジュールで行った。実習後の月1回の振り返りは現在進行中であり、6ヶ月目の報告会は2023年9月に実施予定である。

日程	内容
2022年10月3日～11月4日	学生募集期間
10月11日、13日、14日、17日	何でも相談会
12月14日	マインドアップセミナー(学生対象)
12月24日	チームビルディング&目標設定セミナー①(学生対象)
2023年1月13日	チームビルディング&目標設定セミナー②(学生対象)
1月20日	目標設定塾&顔合わせ(SV対象)
2月10日	マナー研修会(学生対象)
2月13日～3月6日	実習
3月10日	事後モニタリング&目標設定総括セミナー(学生対象)
3月17日	目標設定総括塾(SV対象)&振り返り報告会(全体対象)
6月	3カ月後SV訪問
9月	6か月報告会

実習先企業は、川北印刷・高南メディカル・戸田商行・丸和建設の4社である。参加学生は当初12名であったが、1名(戸田商行)が途中で辞退し、11名となった。参加者は、人文社会科学部(2年生3名、1年生3名)、理工学部(2年生1名、1年生1名)、農林海洋科学部(1年生1名)、地域協働学部(2年生1名、1年生1名)と様々な学部の学生に参加してもらうことができた。

学部	人文社会科学部			教育学部			理工学部			農林海洋科学部			地域協働学部			計
	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	
第21期	1	5		2				1					3			12
第22期	3	3					1	1		1			1	1		11
小計	4	8	0	2	0	0	1	2	0	1	0	0	4	1	0	23
学部計	12			2			3			1			5			23
研究会登録		1											2			3

実習中の日報・週報では、実習での個々の気づきに加え、振り返りでのチームメンバーやSVの言葉による気づきも多く見られた。また、事前・事後のセミナーの振り返り報告でも、手応えを感じているコメントが多く見られ、全体を通してコンセプト通りの成果が得られていた。

一方、第22期の問題点として、実習先までの交通費がある。今回、アンケートにおいて交通費に関する「苦情」が多く、途中で辞退した1名も、そのことを理由の1つに挙げてい

た。これに関しては、次回からは実習先が遠隔地にある場合には JR 駅などへの送迎を実習企業にお願いするなどの対策が必要になると思われる。

5 その他

5.1 学生自主団体 Seekers の活動実績

2022 年度の Seekers では、「対話すなっく」、「オンライン公民館」および「出前養殖プロジェクト」を実施してきた。

5.1.1 対話スナック

全国的に行われている「哲学カフェ」のことであり、日頃気にもとめない当たり前なことについて語り合う場所である。今年度は、高知大学の大学生同士で計 6 回、東北大学、北陸先端大学院の学生および社会人と一緒に計 2 回実施した。

その結果、参加した学生からは、「地域差や経験差がとても面白いと感じた。特に私は四国に関してはつながりが全くなかったため、その部分も面白さを感じた。」や「いままで考えなかったことを考えることができ、非常に良い機会でした。普段さりげなくスルーしていることも、今後はじっくり考えてみたい！」という回答を得た。また、参加した社会人からは、「普段お話ししない方々とお話し出来たこと。問も簡単ですがあまり考えたことのない内容で、面白かったです。」などの回答を得た。

5.1.2 オンライン公民館

オンライン公民館は、月 1 回のペースで開催し、毎回、研究会関係者や Seekers から報告希望者を募る形で以下の表のとおり実施した。

開催回	開催日	タイトル	担当者	備考
第1回	6月2日	スキューバダイビングの魅力	福井 天基	登録学生
		めぐりぐる〜ジオパーク室戸市とはどのような町？〜	宝金 実央	登録学生/Seekers
第2回	6月27日	元鉄道員と鉄道ファンが語る鉄道の魅力	田村樹志雄	客員教員
			利根川 響	登録学生
第3回	7月14日	Mercedes-Benzの魅力	土井皇士朗	登録学生
		海人から山人へ 海拔10mから標高1000mの世界へ	公文 晃生	研究会修了生
第4回	8月24日	食べる魚のお話〜研究の話は全くしません〜	宝金 実央	登録学生/Seekers
		踊る研究者の卵〜北陸先端大での研究と日常〜	萩原 礼奈	研究会修了生
第5回	9月15日	初心者が語る！ゴルフの楽しみ方	臼谷 領馬	登録学生
		キャラクターとともに成長してきた機械音声のいま	坂本 浩毅	研究会修了生
第6回	11月21日	ドリームカーに近づく自動車	東	登録社員
		四国八十八ヶ所 お遍路どうでしょう	利根川 響	登録学生
第7回	12月21日	シャーロック・ホームズの世界	口村 圭	客員教員
		俺のウルトラソウル♪	波多野慎悟	兼務教員
第8回	1月18日	Ghana : A trip to Africa	マコウ	黒潮圏総合科学専攻
		自然への対峙〜登山の魅力〜	小松 風太	研究会修了生
第9回	2月16日	休学から見た世界	池田 詩乃	研究会修了生
		高知の里山のすばらしいチョウたち	鈴木 紀之	兼務教員

5.1.3 出前養殖プロジェクト

最後に「出前養殖プロジェクト」を実施した。企画内容は、主に、ブリ、マダイおよびヒラメの稚魚を園児が飼育した。1日2回の餌やりと水温の確認を毎日実施した。そして、最終日に出前授業（給食に育てた魚種を提供）を実施し、魚という命を我々人間は食べていることを経験してもらった。

2022年度 出前養殖プロジェクト		
開催日	幼稚園	企画内容
6月22日～7月4日	桜井幼稚園	養殖魚飼育, 出前授業
6月29日～7月12日	芸術学園幼稚園	養殖魚飼育, 出前授業
7月26日～8月10日	あおい保育園	養殖魚飼育, 出前授業
10月21日～11月4日	あおい保育園	養殖魚飼育, 出前授業
11月14日～11月25日	興津保育所	養殖魚飼育, 出前授業
12月3日	桜井幼稚園	移動水族館
12月12日～12月20日	芸術学園幼稚園	養殖魚飼育, 出前授業
2月28日	桜井幼稚園と芸術学園幼稚園	養殖場中継
3月6日	あおい保育園	養殖場中継

このプロジェクトの結果、子どもが家庭内で魚に興味を示す行動（例えば、釣りに行きたい。など）に変化が確認された家庭が約70%確認された。また、以前より魚料理を食べるようになり、子どもが保護者に魚料理をリクエストした家庭が約60%確認された。

**幼稚園や保育園に
養殖魚が泳ぐ水槽を設置**

水槽で泳ぐタイなどの魚を見て、目を輝かせる小さな子どもたち。「毎日2回エサやりをしましょうね」という呼びかけに、「はい」と元気良く答えます。ここは高知県四万十町の保育所。水槽の前に立ち、子どもたちから熱い視線を浴びているのは、大学院博士課程に在籍し、水族病理学研究室で魚の陸上養殖を研究している宝金実央さんです。

行われているのは、宝金さんが考案した「出前養殖プロジェクト」。高知県内の幼稚園や保育園などに、一定期間、養殖魚を入れた水槽を設置し、子どもたちに育ててもらおうとユニークな取組です。「子どもたちに魚や漁業に興味を持ってもらうのが目的です」と話す宝金さん。高知大学を拠点とし、産官学文理、高知東京などの協働による「希望創発センター」の活動に参加したことから始まりました。



陸上養殖

養殖ヒラメ

**魚の魅力、
子どもたちにお届け！
出前養殖プロジェクト**

黒潮圏総合科学専攻 博士課程
水族病理学研究室

ほし かん 実央

北海道出身。高校生のときに魚の病気について研究したいと思い、高知大学の農林海洋科学部の水族病理学研究室へ。研究テーマは陸上養殖の魚の健康維持。「生産者の現場から消費者の食卓まで、どのような流れで魚が届くのかを伝えたいですね」



養殖キットの設置



養殖キットの説明をうける園児たち

「センターで2018年、一般の人に農業と漁業に関するキットを取りました。その結果、漁業については怖い、危ない、臭い、魚の匂がわからない、といったネガティブな回答が多かったです。養殖を研究している者として、消費者はそんなふうに思っているんだとショックを受けました」

宝金さんは希望創発センターの活動仲間たちとともに、2019年、高知市内の中心商店街で行われたイベントに参加。ポップアップ水族館と題して、研究室で飼育しているタイやヒラメなどを泳ぐ水槽を展示しました。加えて、漁業について深く知ってもらうべく、漁業者から提供されたカニパチや深海魚も披露、大いに好評を博しました。

る機会を増やしてもらえたらと考えた宝金さん。思いがいたのが、魚に親しんでもらうことから始める取組でした。

手ごたえを感じた宝金さんは、次は自らが主催して、学校給食の企業とタイアップし、子どもたちに直接、魚の良さを訴える行動に出ます。それが同じ研究室の学生たちや希望創発センターメンバーで取り組む出前養殖プロジェクト。2021年1月に初開催して以降、2022年末までに県内の幼稚園・保育園などで計7回行ってきました。



好奇心いっぱいの園児たち



養殖マダイ



養殖キット

取組では、タイなどを入れた水槽を10日間から2週間ほど園に設置し、その間、園児たちにエサやりなどの管理を託します。そして最終日に再度訪れ、養殖現場で行われている作業の動画を撮り、さらに給食で実際にタイを食べてもらいます。

「開催のたびに、家庭で魚を食べる頻度が増えたといいた、うれしい声が増えてきています。研究は社会につながり、消費者や生産者の役に立たないといけません。この取組は今後も続けていこうと思えます」と力強く語ってくれました。



養殖マダイの鯛めしとムニエルの給食



炊き上がった養殖マダイの鯛めし

高知大学発行 コミュニケーションペーパー
Lead 2023 冬号掲載

參考資料

2022（R4）年度希望創発研究会 最終報告会資料の要旨集

最終報告会・チームの報告タイトルとメンバー所属先一覧

チーム	タイトル・メンバー	
1	報告タイトル：「つながり」と「ひとり」のバランス	
	参画社員（セリオ株式会社） 参画社員（株式会社ダイセル）	参画学生（農林海洋科学部） 参画学生（地域協働学部） 参画学生（人文社会科学部） 参画学生（人文社会科学部）
2	報告タイトル：人生変わっちゃう!? 高知で!? ～高知まるごと体験プログラム～	
	参画社員（南海化学株式会社 土佐オフィス） 参画社員（セリオ株式会社）	参画学生（人文社会科学部） 参画学生（農林海洋科学部） 参画学生（理工学部）
3	報告タイトル：こゝ Chill？	
	参画社員（パナソニック コネクト株式会社） 参画社員（株式会社高知銀行）	参画学生（教育学部） 参画学生（人文社会科学部） 参画学生（農林海洋科学部）
4	報告タイトル：関係人口増加へ寄与するための提案	
	参画社員（旭化成エレクトロニクス株式会社） 参画社員（株式会社富士通四国インフォテック）	参画学生（人文社会科学部） 参画学生（農林海洋科学部） 参画学生（地域協働学部） 参画学生（医学部）
5	報告タイトル：人を幸せにする水産業の実現に向けて	
	参画社員（栗田工業株式会社）	参画学生（黒潮圏総合科学専攻）

「つながり」を作ることは本当にいいこと？

1. 背景と概要

1.1 背景

近年 SNS やインターネットの普及で人と人とのつながり方が徐々に変化してきており、リアルなつながりに加えてオンラインでの繋がりも増えてきている。そんな「つながり」方が変化している中、COVID-19 の感染拡大により周囲の人々との関係が分断された。人と距離を置く生活を余儀なくされ孤独を感じる人々も増加し¹⁾、政府では「孤独」に対する対策が掲げられている²⁾。

1.2 検討概要

本チームでは人と人とのつながりに興味を持ち議論する中で、「一人で過ごす時間」が「他者とつながる時間」を豊かにするのではないかという考えに至った。そこで、誰もが人と人とのつながり方をコントロールできる社会を目指したいと考え、ソリューションを検討した。

2. 本論

2.1 「つながり」に関する調査

本チームではまず人はつながりを求めていると仮説を立て、人と人をつなぐ仕事(移住や産後ケア施設)をされている方々を対象にインタビューを実施した。その中で、地域の人同士を無理につなげようとしない姿勢や、子供を持つお母さんにも一人の時間を提供できる施設の存在を知った。また、地域や施設の運営には人と人とのつながりに対する需要と供給のバランスが取れており、「つながり」があってこそ今の仕事ができていると感じられている点が共通していた。

2.2 「孤独」を感じる時につながりを求める？

次に本チームでは人は孤独を感じる時につながりを求めるという仮説を立て、13 名を対象にインタビューを実施した。調査の結果、本当に孤独を感じたことがあると答えた人はほとんどおらず、一方で職場や学校でのつながりに疲れを感じてひとりの時間を必要としている人が多いことが分かった。この結果を受け、本チームでは世の中には人とつながれるツールは揃っているが、「ひとり時間」を作るためのツールが少ないことに気づいた。

2.3 「ひとり時間」のコントロールツール

「つながり」と「孤独」に関する調査の結果、本チームではこれからの社会には人と人とのつながりを作る手段よりも、人と人とのつながり方をコントロールする手段が必要だと考えた。大学生を対象にした調査でも他者と過ごす時間と「ひとりの時間」のバランスがアイデンティティの確立にポジティブに働く可能性があることが分かっている³⁾。コントロールツールの一つとして会社員を想定し、個人の置かれている状況に応じてどのようなひとり時間を確保すれば良いかが分かるチャート図を作成した。このチャート図を使うことで、どのようにひとり時間を作り、過ごせば良いのか分からない人でも簡単に自分に合ったひとり時間を見つけることができると考えた。

3. 結論とチーム1が目指す社会

以上の検討から、本チームでは誰もが家、職場などで人と人とのつながり方をコントロールできる仕組みを提案し、「ひとりの時間」と「つながる時間」のバランスが取れる社会を目指す。

【引用文献等】

1) コロナ下での人々の孤独に関する調査を実施、国立研究開発法人科学技術振興機構(JST), 2022

- 2) 孤独・孤立対策に関する政府の取組, 内閣官房孤独・孤立対策担当室, 2021
- 3) 大学生における「ひとり時間」の検討および自我同一性との関連, 増淵(海野)裕子, 日本青年心理学会『青年心理学研究』, 2014, pp.121

以 上

人生変わっちゃう!? 高知で!? —高知まるごと体験プログラム—

1. はじめに

1.1 フィールドワークから見えた大切にしたい価値観

チーム2では、これまでの例会を通して、高知市で自転車屋さん、帽子屋さん、味噌屋さんのインタビュー、須崎市で SUP、高知坂本龍馬記念館訪問、北川村でのゆずフェス、キャンプなどの様々な活動を実施し、高知の自然の豊かさ、人々の地域への愛着を感じた。また、メンバーの中に、「生きづらさ」を感じている者がいたことに加え、メンバーの共通理念として「人の役に立ちたい」という思いがあったことから、「生きづらさの軽減」ということについてチーム2で考えるようになった。そして1年間の活動を通じて、「高知の豊かさを大事にする心意気」を土台にして「生きづらさの軽減」と「高知の魅力発信」を大切に進めることとした。

2. 『高知まるごと体験プログラム』

2.1 「生きづらさ」を軽減するには？

当初、チーム2では「生きづらさ」を解消するにはどうすればよいか議論を重ねたが、「生きづらさ」という事柄は非常にセンシティブな内容であることから、素人が気安く踏み込めない分野と感じるようになった。しかし、「生きづらさ」を感じていたメンバーが、高知の自然や人と関わったことで「生きづらさ」を軽減できたという実体験から、これまでチーム2で体験した活動を融合することで「生きづらさ」を軽減するきっかけ作りができるのではないかと考えた。また、「生きづらさ」の軽減をポジティブに捉えなおし、「人生観が変わった出来事は？」という内容についてアンケートを行った。アンケート結果から、人生観が変わった出来事の3/4は人が関わっていることが明らかとなった。

2.2 ターゲット

「人生観が変わった出来事は？」というアンケートに加え、「人生観が変わった年齢は？」というアンケートを行った。このアンケートから、主に高校在学以降の若いころの経験が今後の人生に大きな影響を与えることが明らかとなった。この結果より、主に高校在学以降の若年層をターゲットとした。

2.3 生きづらさの軽減のきっかけ作り、高知の魅力を発信する場としての『高知まるごと体験プログラム』

上記の事より、我々は『高知まるごと体験プログラム』を提案する。この活動は高知県の豊かな自然と地方のおおらかな人間性、おいしい食べ物など通じて「生きづらさ」を軽減するきっかけ作りと、高知県の魅力を発信することを目的としている。具体的なプログラム内容としてはチーム2が体験した「ゆず狩り」「キャンプ」「料理」「スポーツ」を参加者が自由に選択できるものを考えている。これらのプログラムを学校やNPOなどの家庭や地域とつながりのある機関と提携することで、本プログラムに参加する窓口を広げることができるのではないかと考える。

3. 人生変わっちゃう!? 高知で！？

『高知まるごと体験プログラム』の取り組みを通じ、ターゲットが心にゆとりや豊かさを持つことに加え、多様な越境学習が伸展する。そして、よりよい人生が開け、well-beingな人物を創出することができると思う。

【引用文献】

・長沼睦雄（2017年）『敏感すぎて生きづらい人の 明日からラクになれる本』永岡書店。

・内閣府（2020年）『特集1 子供・若者の意識と求める支援について』

https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/r02honpen/s0_1.html（閲覧 2022/1/7）

こう Chill ?

チーム3は、残したい文化・伝統の担い手と知りたい・学びたい人をつなぎあわせたい。教える側にはいきいきと貢献できる場所・役割を与えること、教わる側は高知の隠された魅力を知り、高知県と継続的に何らかの関わりを持ってもらうことを目標とした「こう Chill ? 」というテーマのもと1年間活動してきた。具体的な価値提供の立案まで到達することができなかったのは悔やまれるが、学生や社会人という年齢・役割にこだわらず、全員が一生活者として意見を交換する「プロセス」を大切にこの一年間を過ごした。活動のなかで、それぞれメンバーの興味関心を共有しながら、高知県をフィールドとして、本当にそれが問題であるか、勝手に問題にしていなかったかを確認するため、現地に足を運んでとことん話を聞くことを徹底した。

我々のチームは土佐町石原地区をフィールドとして、現地訪問とインタビュー調査を複数回実施した。現地での調査から、人口減少・高齢化が進み、地域における集落活動の維持が難しくなるなかで、“居場所”があるということを感じる喜びと幸福感、本当は伝統や文化を残せるものなら残したいという想いを受け取った。我々のチームがそうした地域活動を盛り上げ、もしくは活動するのではなく、あくまでそこに暮らす当事者が「幸せ」であることを最重要視し、何ができるのかを考えた。その結果、そうした地域の人たちがいきいきと役割をもって貢献できる場所があれば幸せに生きることができるのではないかと、隠れた魅力がたくさんある高知を知ってもらうことで関係人口だけでも増やしていくことができるのではないかとチームのメンバーで考えるに至った。それが「こう Chill ? 」というチームテーマとして結実したのである。

「こう Chill ? 」とは、「場所×役割×貢献」が今の生活をより豊かにし、自分の居場所（セカンドプレイス）を創出するとともに、高知の隠された魅力を知りたいという人・そもそも知る機会がなかった人に対して知る機会を創出して、双方が“Give & Give”の関係を作り出すことを目標とする。チーム3が独自に行ったアンケート調査の結果、高知県における文化・伝統の担い手は7割が、その文化・伝統を残したい、誰かに伝えたいと考えていることが分かった。他方、高知の文化・伝統への参画について、これまで体験する機会がなかったが、これからの参加に前向きであるということも明らかになった。

「こう Chill ? 」プロジェクトを通じて、高知県ならではの食文化や伝統的な行事の担い手が人口減少や高齢化のなかでもいきいきと役割をもって活躍することは、全国各地と高知県の関係人口を増加させるとともに、各人が幸せに暮らしていく一つの処方箋となるのではないかと考えている。今後は高知大学における授業としての導入や「Chill ? 」プラットフォームを活用した“Give & Give”のマッチングサービスなど、夢のある価値提供の立案に発展させることができるかもしれないと今後の展望を述べる。

以上

関係人口増加へ寄与する提案

1. 私たちがやりたいこと

1.1 背景

高知県の人口は年齢を問わず減少の一途を辿っている。この状況が続けば高知県の経済規模の縮小が必至であり、経済が縮むことで県民の流出が進む。高知という土地について詳しく見ていくと93%が中山間地域であり⁽¹⁾、その中の多くの地域が過疎市町村となっている⁽²⁾。この状況では1つの過疎地域に人を呼び込んだとしても焼け石に水であり、人口減少の問題には歯止めが効かない。

1.2 チームが立てた問い

前述の背景から我々が考えたことが、中山間地域を含む高知全域に人を呼び込む施策を提案することはできないか。また、その提案の中に高知の良いところや課題点が含まれたものを考えてみたいということである。

2. 研究活動について

2.1 ゴミ問題（9月）

まずテーマ決めから始まった我々の活動は、メンバーそれぞれが興味のある地域課題を調べて持ち寄ったがなかなか決めることができずにいた。そこでメンバー全員が共感できるような身近な問題を選ぶこととなり、最終的にゴミ問題がチーム活動をしていく上でのテーマとなった。

2.2 転機（10月）

ゴミ問題をテーマにした我々は、10月の活動で実際にゴミ拾いをしてみることでゴミ問題の当事者だけが気付けることを探してみることになり、連日高知を回りゴミの清掃やインタビューを行った。しかし2日目に行った仁淀川町でのインタビューによって活動テーマの方向性が大きく変わることになる。中山間地域かつ観光業が営まれる仁淀川町で、祭りなどのイベント運営をされている方に話を伺ったところ、ゴミ問題よりも人手不足が大きな問題になっているとの意見が上がったからである。

2.3 人手不足（11月）

前月の活動で人手不足問題が中山間地にあると判明し、この問題をどのような施策が解決できるか考えることが新しいテーマになる。人手不足問題の解決策を探すべく、11月の活動では県内の中山間地域、都市部それぞれで開催されるイベントに参加した。イベントを通じてメンバー各々が感じたことは違うこともあったが、中山間地域を活性化させれば人が流入して人手不足も解消できるのではないかという結論は共通認識であった。

2.4 関心事の違い（12月）

中山間地域を始めとする高知全体を活性化するために、県外などの外部から人を呼び込むための地域の特色（良いところ・悪いところ問わず）を利用した案をメンバー各自で考えた。その結果、メンバーそれぞれが持つ関心事が少しずつ違うことがわかった。具体的には郷土料理や起業のネタ、移住者のサポート、遊休農地の利用、旅行プラン等が挙げられ、混ぜることができそうな案を合わせていくと2つの案が生まれた。

2.5 【提案1.隙間時間で高知を楽しむ！！】

1つ目の提案は、高知の公共交通機関の不便さ（1本逃したら数時間待つことになる）を利用したものである。高知にきた旅行客がときたま遭遇する何もすることが無い待ち時間を使い、その隙間時間で観光できるスポットを紹介するものである。この案にはQRコードをスキャンすることで観光プランを提案するという独自性もある。

2.6 【提案2.高知版ワーキングホリデー】

2つ目の提案は、異文化滞在制度であるワーキングホリデー⁽⁵⁾を移住者向けに高知で実施する案である。内

容としては、移住先が決まっていないが移住欲求がある人を高知内の移住候補地域に招致し、地域内で働くことを対価に無償で日常生活を送ることができるものである。この案では、移住したい人は移住前に地域の情報を経験で知ることができ、地域に住む人は移住してくる人の人柄などを知ることができることが利点となっている。

3. 結論

本活動の最終結論として高知の問題点・良いところが含まれた、人を呼び込むための施策を2つ提案することとなった。1つは高知のファンを増やせる施策、もう1つは高知へ移住者を呼び寄せる施策である。この2案が実施されることで高知の関係人口の増加を見込むことができる。一方で我々の案は、提案しているコンテンツの充実や展開が不足しているため、発展の余地があると考えられる。

【参考文献】

- 1) 一般社団法人高知県移住促進・人材確保センター「知ってた?! 高知県の93%が中山間地域」
([知ってた?! 高知県の93%が中山間地域 | 高知家で暮らす \(kochi-iju.jp\)](https://www.kochi-iju.jp/)23.2.27)
- 2) 高知県「高知県における過疎地域と中山間地域について」
([file_20183202164136_1.pdf \(kochi.lg.jp\)](https://www.kochi.lg.jp/file/20183202164136_1.pdf)23.3.1)
- 3) 外務省「ワーキング・ホリデー制度」([ワーキング・ホリデー制度 | 外務省 \(mofa.go.jp\)](https://www.mofa.go.jp/)23.2.20)

以 上

人を幸せにする水産業の実現に向けて

1. 日本社会の現状

近年、コロナ禍や国際情勢の不安定化による食糧価格の高騰、日常生活に悪影響を及ぼすような気象変動の顕在化、企業の脱炭素化、SDGs への取り組み加速など、社会環境は目まぐるしい速さで大きく変化し、持続可能な食糧・エネルギー生産システムの社会的ニーズは確実に高まってきている。一方、地方では人口減少が続く中で、物を生産し消費する生産年齢人口の減少により地域経済は縮小の一途を辿っている。この経済の縮小が若者の県外流出を招き、特に中山間地域の衰退や少子化が顕著となり、人口減少に拍車がかかるといふ負のスパイラルを招いている。私たちは高知県 室戸市での森林組合、農協、生産業者への現場取材を通じて、私たちの生活や生命の基盤となっている農林水産業を営む集落の衰退が深刻であり、いざ一次産業の国内強化といった時代が到来しても、その基盤を支えている集落の一次産業自体が消滅していて、日本全体が地盤沈下を起こしかねない危機的な状況にあることを実感した。以上のことから、我々は、1 次産業で特に深刻である水産業に注目して、水産業に関わる全ての人々が希望を持ち、皆が幸せに暮らせる社会の実現を目的に、魚類生産および水産業について今後のあるべき姿を具体的に提案する。

2. 水産業を正しくする

2.1 魚を自然の法則に則り飼育する

一般的に、魚類養殖生産では、単一魚種を飼育し、残餌や排泄物が蓄積することで、水質汚染や溶存酸素濃度の低下が起り、供給が必要となる。また、魚類を生産する過程では、水質浄化や溶存酸素濃度の供給にはランニングコストがかかることが課題である。そこで、我々は、海洋環境下の生態系 (=自然の法則) に則って、陸上水槽に複数の生物を組み合わせて飼育することで水質浄化ができないか仮説を立てた。今回は、水質浄化が見込まれる「藻類」および「貝類」に注目し、魚類と同系列の飼育水で飼育することを提案した。その結果、藻類によって、魚類に対して毒性が認められるアンモニアおよび亜硝酸を吸収した。一方、貝類は他生物と飼育環境条件が異なるため、複合的に飼育することが困難であった。よって、魚類と藻類の複合養殖は、水質浄化を促進させ、さらに藻類の光合成によって飼育水中に溶存酸素が供給されることに繋がった。

2.2 アプリによるリアルタイム遠隔養殖

消費者は、魚類が肉類と比較して販売価格が高いと感じていることを理由に魚の消費量は伸びておらず、担い手不足が深刻化している。そこで、アプリを用いたリアルタイム遠隔養殖システムの開発を試みて、遠隔地でカメラや自動給餌機を用いて毎日養殖魚の飼育を行う事業について検討した。この経験から、魚を飼育する際に必要な物品やその価格を正しく理解しながら、楽しく養殖魚を飼育することが可能となる。さらに、チャット機能を用いて、魚好きの人が多様なアイデアを出し合い、その情報を収集し、今後の陸上養殖システムの開発のヒントとなることが期待される。

3. 今後に向けて

今後は産官学でコンソーシアムを結成し、事業実証プラントにて技術蓄積と事業ノウハウを獲得する。次に事業領域の拡大 (ハウス園芸、エネルギー) とともに社会実装を目指す。食糧生産システムを実装した工場は子供たちの教育の場にもなり、最新のテクノロジーを体現して実感しながら学び、子供たちから好奇心を引き出し、数学、化学といった基礎科目を主体的に学ぶ動機づけとしていきたい。勉強することの目的や意味を現場での

体験をとおして実感してもらい、次世代の教育と一次産業の発展に繋げ皆が幸せになる水産業の実現を目指す。

以上

